

## 9) ワレモコウ＝吾亦香／吾亦紅

ワレモコウはバラ科の多年草で、ユーラシア大陸に広く分布する。日本では北海道から九州にいたる各地の野原や高原などに群生し、高さは 30cm～1m ほどになる。葉は奇数羽状複葉で互生し、小葉は長楕円形もしくは楕円形で 7～11 枚あり、縁には粗い鋸歯がある。夏から秋にかけて茎と枝の先に短い穂状花序を出して、暗紫紅色の花弁のない花(無花被花=05-01-06 秋明菊の項参照)を開く。根茎は太くて横に走り、細長い根を多数付ける。和名の由来は「和木香」で、日本のモッコウ(木香はインド北部に自生する芳香があるキク科の多年草)の意味であるとする説、4 弁の萼と 4 本の雄蕊が、神社や宮殿などの御簾の上部にかぶせた帽額(モッコウ)に描かれた、木瓜(モッコウ)という文様を割った形に似ているためとする説、葉に切れ込みがあり、茎葉に香気があるところからとする説、などがある。しかしワレモコウには特に香りはなく、また吾亦紅の漢字も後世の当て字であるところから、この植物名の由来は定かではない。別称としてエビスグサ、エビスネ、ダンゴバナ、オボンバナ、ウマズイカ、など多くの呼び名がある。またアイヌは「ソプンクルキ」と呼んでおり、これは「ウグイ」のエラという意味である。暗紫紅色のこの花の色と、暗紅色のウグイのエラとを重ね合わせたのだろう。学名は『*Sanguisorba officinalis*』で、属名は「sanguis＝血液」と「sorbere＝吸収する」との合成語で、種小辞は薬効のあるという意味である。イギリスではワレモコウ属を『burnet』と呼び、フランスでは『pimprenelle』、中国では『地榆』である。

ワレモコウは漢方では古くから乾燥させた根茎を『地榆』(チユ)と称して、止血、収斂、解熱剤として利用し、赤痢、月経過多、咯血、切り傷、皮膚病、火傷などの治療に煎服してきた。また煎液は口内炎のうがい薬にもなったばかりか、若葉は食用にもなり、大事な植物の一つであった。江戸時代末期に記された『本草綱目啓蒙』には、「ワレモコウに同名多し。ジャコウソウ、オケラ、カルカヤに似たる草、皆ワレモコウの名あり」としている。植物の分類が未成熟だった時代、花の季節や、色、形が似たものは同じ名前と呼ばれることも多かったのだろう。因みにジャコウソウはシソ科、オケラはキク科、カルカヤはイネ科で、これらの植物に相互の関わりはない。こうした背景を知ってか知らずか、若山牧水は放浪を続けていた若き日に信州で、

吾亦香すすきかるかや秋くさの さびしききはみ君におくらむ

という歌を残している。その独特の姿が、秋の寂寥感を一層のこと増幅させたのだろう。『源氏物語』の「匂宮」では「衰へ行く藤袴(フジバカマ)物げなき われもこうなど…」として、匂兵部卿が庭の一角に吾亦香を植えるくだりがある。微かな秋風に揺れる吾亦香の姿は、当時から人々の心をとらえる何かがあったのだろう。また『出雲国風土記』には地榆(エビスネ)として、仁多郡(ニタゲン)の産物として記されている。

ところで堀内孝雄がその昔、歌っていた歌で『吾亦紅』といういい曲があった。作詞はちあき哲也氏、作曲は杉本真人氏で、2007年2月テイチクから発売された。

マッチを擦れば おろしが吹いて  
線香がやけに つき難(にくい)  
さらさら揺れる 吾亦紅  
ふと あなたの 吐息のようで…  
盆の休みに 帰れなかった  
俺の杜撰(ズル)さ 嘆いているか  
あなたに あなたに 謝りたくて  
仕事に名を借りた ご無沙汰  
あなたに あなたに 謝りたくて  
山裾の秋 ひとり逢いに来た  
ただ あなたに 謝りたくて

小さな町に 嫁いで生きて  
ここしか知らない 人だった  
それでも母を 生き切った  
俺 あなたが 羨ましいよ  
今はいところが 住んでる家に  
昔みたいに 灯りがともる  
あなたは あなたは 家族も遠く  
気強く寂しさを 堪えた  
あなたの あなたの 見せない疵(キズ)が  
身に沁みて行く やっと手が届く  
ばか野郎と なじってくれよ

親のことなど 気遣う暇に  
後で恥じない 自分を生きろ  
あなたの あなたの 形見の言葉  
守れた試しさえ ないけど  
あなたに あなたに 威張ってみたい  
来月で俺 離婚するんだよ  
そう、はじめて 自分を生きる

あなたに あなたに 見ていて欲しい  
髪に白髪が 混じり始めても  
俺、死ぬまで あなたの子供…



ワレモコウの花は秋風によくなびく。しかしその姿はどこか物悲しい(長野県蓼科高原)。



ワレモコウの花。夏が去って秋風が吹き抜けてゆくころ、高原でこの花が咲き出す。牧水をして「さびしききわみ」と言わしめた、その理由がわかるような気がする(長野県川上村)



秋風になびくワレモコウの花。長野県だったら線路の縁などに普通に見られる(長野県軽井沢町)。この花にはゴマシジミという蝶が産卵にやってくる。吾亦紅の自生している所では比較的よく見られる蝶であるが、この蝶もアリの巣の中で越冬して、アリの巣の中で蛹になって羽化する(01-06-02)。



牧水はさびしきはみと歌った。ちあき哲也氏はさらさら揺れると表現した。どちらも同じ夏の終わりと、秋の訪れを伝えるワレモコウの花である(長野県軽井沢町)。 [目次に戻る](#)